慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	がんサバイバーに対する「ストレングスを基盤とした支援」のあり方と課題
Sub Title	The effective practices and issues of strengths-based care for cancer survivors
Author	新幡, 智子(Arahata, Tomoko)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究の目的は、がん看護の経験豊富な専門看護師・認定看護師を対象に、がんサバイバーのストレングスをどのように認識し、そのストレングスをどのように支援に活用しているかという支援の実際について半構造化面接により明らかにし、ストレングスを活用した支援の普及に向けた示唆を得ることである。 研究対象者は11名で、テーマ分析の手法により分析した結果、看護師の捉えるがんサバイバーの内的ストレングスについてやストレングスを活用した支援の実際が明らかとなった。 The purpose of this study was to explore how nurses recognize strength of cancer survivors and apply their strength to provide their care in clinical setting and to get suggestions for spread of strengths-based care for cancer survivors using semi-structures interviews. Interview data were transcribed and analyzed using Braun and Clarke's reflexive thematic analysis. The interviews were conducted with 11 Certified Nurse Specialists and Certified Nurses, who had extensive experiences in providing care to cancer survivors. The results of thematic analysis were identified perceived inner strengths of survivors by nurses and actual care applying their strength in clinical setting.
Notes	研究種目：若手研究 研究期間：2022～2023 課題番号：22K17479 研究分野：がん看護学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_22K17479seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１７４７９

研究課題名（和文）がんサバイバーに対する「ストレングスを基盤とした支援」のあり方と課題

研究課題名（英文）The effective practices and issues of strengths-based care for cancer survivors

研究代表者
新幡　智子（ARAHATA, Tomoko）

慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・講師

研究者番号：６０４５８９５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、がん看護の経験豊富な専門看護師・認定看護師を対象に、がんサバイバーのストレングスをどのように認識し、そのストレングスをどのように支援に活用しているかという支援の実際について半構造化面接により明らかにし、ストレングスを活用した支援の普及に向けた示唆を得ることである。
研究対象者は11名で、テーマ分析の手法により分析した結果、看護師の捉えるがんサバイバーの内的ストレングスについてやストレングスを活用した支援の実際が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
がん看護の経験豊富な看護師の視点から、実際にがんサバイバーのストレングスをどのように短期間の中で見極め、それを発揮できるようなケアを実践しているかという実態を明らかにすることは、臨床現場で実際に実践可能なストレングスを活用した支援を見出すことになり、がんサバイバーのQOLの向上に向けたケアの質の向上につながる可能性がある。また、それらの支援の普及に向けて示唆を得ることは、「がんとの共生」を目指す社会において、がんサバイバーのQOLの向上に向けた支援の普及における一助となると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore how nurses recognize strength of cancer survivors and apply their strength to provide their care in clinical setting and to get suggestions for spread of strengths-based care for cancer survivors using semi-structures interviews. Interview data were transcribed and analyzed using Braun and Clarke's reflexive thematic analysis. The interviews were conducted with 11 Certified Nurse Specialists and Certified Nurses, who had extensive experiences in providing care to cancer survivors.
The results of thematic analysis were identified perceived inner strengths of survivors by nurses and actual care applying their strength in clinical setting.

研究分野：がん看護学

キーワード：ストレングス　がんサバイバー　がん看護

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　C－１９、F－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国では、がんと共に生きる「がんサバイバー」が増加し、「がんとの共生」が国のがん対策の１つに掲げられている。医療技術の進歩により、一般病床の平均在院日数は年々短縮されているが、短い入院期間の中だけでは、がんサバイバーが直面するすべての問題・課題を解決することは難しく、がんサバイバーは、退院後も、治療に伴う副作用への対処など自身の問題・課題と向き合いながら、継続的にセルフマネジメントに取り組み続けていくことが求められる。また、がんサバイバーの中には、がんやがんの治療の影響によって、長期間に渡る合併症や晩期合併症、心理社会的な問題などにより、社会生活を送ることが困難になる人もいる。そのような中で、がんサバイバーの Quality of Life(QOL)の向上が示唆される支援の１つに、その人の「ストレングス（強み）」に注目し、それを発揮できるような支援が挙げられる[1)-3)]。

そのため、看護師が、退院後も継続して、その人の問題に注目する従来の問題解決志向だけでなく、がんサバイバーがこれまでの人生の中で培ってきた力や潜在する力であるその人の持つストレングスにも目を向け、その人自身をアセスメントし、退院後の生活や生き方を見据え、その人のストレングスを活用できるような支援を実践していくことによって、がんサバイバーの QOL の向上やその人らしく生きることを支える支援につながると考える。先行研究では、がんサバイバーが多くのストレングスをもつこと[4)]やがんサバイバーの視点から、がんサバイバーのストレングスについて明らかになっているが、わが国のがんサバイバーに対するストレングスを活用した支援の実際や課題については明らかになっていない。

なお、本研究では、「ストレングス」は、人間がもつ力の１つで、個人の価値観を反映し、個人が前へ進もうとする動的な性質を有するもので、人生の困難や不確実性に対処することができる能力を指す。また、「がんサバイバー」は、がんと診断され、初期治療が終了した人、また再発を抱えながら生活している人を指すこととした。

２．研究の目的

本研究は、がん看護の経験豊富な看護師は、がんサバイバーのストレングスをどのように認識し、そのストレングスを活用できるようにどのようにケアに活用しているのかといったストレングスを活用した支援の実際を明らかにすること、そして、ストレングスを活用した支援を実践するうえでの課題やストレングスを活用した支援の普及に向けた示唆を得ることを目的とした。

３．研究の方法

(1) 研究デザイン：テーマ分析を用いた質的記述研究

(2) 研究対象者

がん看護の臨床経験が 5 年以上あり、これまでに外来または相談支援室でがんサバイバーの支援の経験がある専門看護師、認定看護師とし、スノーボールサンプリングにより対象者を抽出した。

(3) データ収集

データ収集は、関東近郊のプライバシーを保つことができる貸会議室や病院内の個室において、インタビューガイドに基づき、半構造化面接を行った。その際、研究対象者の許可を得て、インタビュー内容を IC レコーダーに録音した。インタビューの内容は、日々の臨床実践において、がんサバイバーのストレングスをどのように認識しているか、ストレングスをアセスメントする必要性はどのような時に感じ、実施しているか、そして、実際にどのようにストレングスを活用してケアを実践したか、またそのケアの際に、何を大切に実践しているか等について、対象者の臨床現場における具体的な体験をふまえて、データ収集を行った。

(4) 分析方法

IC レコーダーに録音したデータから逐語録を作成し、Braun V と Clarke V のテーマ分析の手法に基づいて、以下の①～⑦の手順[5)]：【①インタビューデータから逐語録を作成し、コーディング単位を決定する、②逐語録を熟読する、③コーディング単位ごとに語りを要約する、④コーディングブックに記録する、⑤逐語録内のコードの類似性と相違性を探索し修正する、⑥テーマコードを作成する、⑦逐語録間の類似性と相違性を探索し修正する】で行った。

上記を通して、対象者の捉えるストレングスやそれを活用した支援について、分析結果をまとめた。

なお、本研究は、慶應義塾大学看護医療学部研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得たうえで、実施した（324）。

４．研究成果

(1) 研究対象者の概要

本研究の研究対象者は、11 名で、がん看護専門看護師：9 名、がん化学療法看護認定看護師：2 名であった。研究対象者の臨床経験年数は、平均 24.73 年で、がん診療連携拠点病院や一般総合病院などに勤務していた。半構造化面接はそれぞれ 1 回ずつ行い、インタビューの平均時間は 52.91 分／回であった。

(2) 結果

IC レコーダーに録音したデータから逐語録を作成し、テーマ分析に基づいて分析した結果、看護師が認識する内的ストレングスについて、そして、ストレングスを活用する支援の実際について明らかにすることができた。

対象者は、人は、必ずストレングスとなる力をもっており、それはその人ごとに異なっているという前提を持ちながら、目の前のサバイバーと向き合っていた。そしてサバイバーのことを知ろうとする際、その人ができていることとして表面化されている力だけでなく、その人の内に潜在している力があると捉え、それはその人が大切にしていることにも反映していると認識していた。また、ストレングスは、低下したとしても回復するものであると認識し、サバイバーががんと共に生きるうえでの原動力となっていると捉えていた。

そして、上記の特性をもつストレングスを実際に支援に活用する際は、サバイバーがこれまでしてきた経験の語りからストレングスを洞察し、潜在性を認識した際は、それが機能するように働きかけ、力をさらに伸ばすことを意識して支援していた。また、看護師がその人のストレングスを一方的に見つけるのではなく、サバイバー自身が自分のストレングスに気づけるように、困難に対するこれまでの対処の仕方や日頃から何気なく実践していることを言語化してもらい、自分を俯瞰して見ることを促していた。そして、これまで対処してきたことやできていることを具体的に言語化させるとともに、そのことを称賛してフィードバックすることによって、自身のストレングスを意識化させ、そのうえで、ストレングスをいかす方法を共に考える姿勢で支援することで、サバイバーは必要なセルフケアの実践に取り組むことができていくと捉えていた。

一方で、ストレングスは個々で多様であり、その時の状況に応じながら支援を変更していく必要性があることから、他職種や他ナースに共有するうえで試行錯誤しながら、ルーティン化できない個別的なケアであるからこその難しさも感じており、普及において課題があることが示唆された。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

本研究を通して、看護師の視点から、わが国におけるがんサバイバーに対するストレングスを活用した支援の実際について明らかにすることができたことは、意義があると考える。

今後は、がんサバイバーに対するストレングスを活用した支援の普及に向けて、より臨床に即した表現に精錬し、他職種を含めて、共通認識できるようにしていくこと、そして、「がんとの共生」が課題となっているわが国において、がんサバイバーの QOL の向上に対する有効性を検証していくことが必要だと考える。

＜引用文献＞

1) Dingley C & Roux G. The role of inner strength in quality of and self-management in women survivors of cancer. Research in Nursing and Health. 2014. 37(1): 32-41.
2) Ha S & Ryu E. Perceived new normal and inner strength on quality of life in breast cancer patients receiving adjuvant endocrine therapy. Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing. 2021. 8(4): 377-384.
3) Gottlieb LN, Gottlieb B and Shamian J. Principles of Strengths-based nursing leadership for strength-based nursing care: a new paradigm for nursing and healthcare for the 21st century. Nursing Leadership. 2012. 25(2): 38-50.
4) Rotegard AK, Fagermoen MS, and Rulamd CM. Cancer patients' experiences of their personal strengths through illness and recovery. Cancer Nursing. 2012. 35(1): E8-

E17.
5) Braun V & Clarke V. Using thematic analysis in psychology. Qualitative Research in Psychology. 2006. 3(2); 77-101.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関